## 織込部交通流の交互配置化の Simulation および Cluster 解析

西遼佑<sup>1</sup>, 三木弘史, 友枝明保<sup>1</sup>, 西成活裕<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup> 東京大学大学院工学系研究科 航空宇宙工学専攻 <sup>2</sup> (独) 科学技術振興機構 さきがけ

#### 概要

合流部・織込部で発生する渋滞は、大きな社会問題となっている。この渋滞を軽減するために、車の交互配置化、すなわち二車線上でのジグザグ配置化について議論する。交互配置は、ジッパー効果により、スムーズな合流を実現するという長所を持つ。この交互配置が local な車線間相互作用のみで達成されることを、Cellular Automaton (CA) を用いた Simulation および Cluster 近似を用いて示す。交互配置の達成度の空間方向の変化を比較したところ、理論解析結果は、Simulation 結果と非常に良く一致することが見出された。

# Simulations and Cluster Analysis of the Alternative Configuration of Vehicles on Weaving Section

Ryosuke Nishi<sup>1</sup>, Hiroshi Miki, Akiyasu Tomoeda<sup>1</sup> and Katsuhiro Nishinari<sup>1,2</sup>

Department of Aeronautics and Astronautics, Faculty of Engineering, University of Tokyo
PRESTO, Japan Science and Technology Corporation

#### Abstract

Heavy traffic congestion daily occurs at merging sections on highway. For releasing this congestion, possibility of alternative configuration of vehicles on multiple-lane road is discussed in this paper. This is the configuration where no vehicles move aside on the other lane. It has a merit in making smooth merging at an intersection or a junction due to so-called the "zipper effect". We show, by developing a cellular automaton model for multiple lanes, that this configuration is simply achieved by local interactions between vehicles neighboring each other. The degree of the alternative configuration in terms of the spatial increase of parallel driving length is measured by using numerical simulations. Moreover, we successfully construct a theoretical method for calculating this degree of the alternative configuration by using cluster approximation. It is shown that the theoretical results coincide with those of the simulations very well.

#### 1 研究背景

交通流の研究は、理学的な観点および工学的な観点から近年ますます盛んに行われている [1] [2]。交通流の基本である一車線交通流の研究は、連続モデル [3] や Cellular Automaton (CA) [4] などで発展してきた。より複雑な合流部や織込部における流れ

の研究も、渋滞改善の観点から発展が期待されている。合流のある流れの先行研究としては、ゲーム理論を用いたもの [5]、Agent Based Simulation を用いたもの [6]、および Optimal Velocity Model [3] に車線間相互作用を付加したもの [7] などが挙げられるものの、いずれも、合流が行われる際のミクロな

車の配置の変化を詳細に解析していない。しかしながら、車の配置関係は合流の効率を決定付けるものであり、中でも交互配置状態は、二車線上の車がかわりばんこに合流するジッパー合流を実現するため、最も効率の良い配置状態であると考えられる。ゆえに、車の配置状態を交互配置状態へと遷移することは、合流部流れを改善する上で大きな意義があると考えられる。

本研究の目的は、二車線上の車の交互配置状態を達成する簡潔な方法を提案することである。この提案を、CAによる Simulation と、Cluster 近似による理論解析とで評価する。Simulation では、二車線間で相互作用のあるモデルとして Multiple Lanes Stochastic Optimal Velocity (MLSOV) model を用いる。このモデルは、Stochastic Optimal Velocity (SOV) model [8] に車線間相互作用を付加したモデルである。

## 2 交通流モデル

ここでは、MLSOV model について説明する。 MLSOV model は、二車線上の車の配置の変化を、一方の車線上の車が反対車線の車を見ながら運転することで起こる現象であると想定する。なお、本研究では合流前の車の交互配置化達成のみに注目しているため、二車線間の車線変更は考慮されていない。 このモデルにおいて、車iは、直前 cell が空の場合のみ、1step で確率 $v_i^t$ で 1cell だけ移動する (図 1)。

$$x_i^{t+1} = \begin{cases} x_i^t + 1, & \text{with probability } v_i^t \\ x_i^t, & \text{with probability } 1 - v_i^t, \end{cases}$$
 (1)

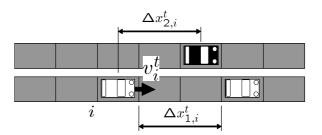
 $v_i^t$  は intension と呼ばれる物理量 [8] であり、 $v_i^t$  は 反応パラメータ  $0 \le a \le 1$  を介して  $V(\Delta x_{1i}^t, \Delta x_{2i}^t)$  に近づくように時間変化する。

$$v_i^{t+1} - v_i^t = a \left\{ V(\Delta x_{1i}^t, \Delta x_{2i}^t) - v_i^t \right\}, \quad (2)$$

ここで、 $V(\Delta x_{1i}^t, \Delta x_{2i}^t)$  は Optimal Velocity(OV) 関数 [3] であり、その引数たる自車線車間距離  $\Delta x_{1i}^t$  ならびに他車線車間距離  $\Delta x_{2i}^t$  に対する理想速度を表す。以降、 $V(\Delta x_{1i}^t, \Delta x_{2i}^t)$  を

$$V(\Delta x_{1i}^t, \Delta x_{2i}^t) = \begin{cases} 0, & \Delta x_{1,i}^t = 0 \\ r, & \Delta x_{1,i}^t \ge 1 \text{ and } \Delta x_{2,i}^t = 0 \\ q, & \Delta x_{1,i}^t \ge 1 \text{ and } \Delta x_{2,i}^t = 1 \\ p, & \Delta x_{1,i}^t \ge 1 \text{ and } \Delta x_{2,i}^t \ge 2. \end{cases}$$

のように決定する。MLSOV model は、a=0 の場合は単車線 Asymmetric Simple Exclusion Process (ASEP) [9] に相当し、a=1 の場合は二車線 Zero Range Process (ZRP) [10] に相当する。

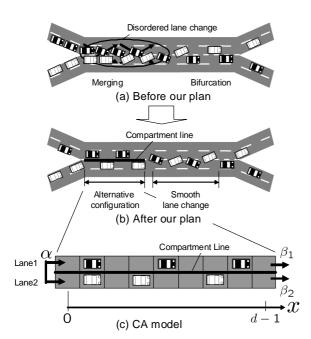


☑ 1: The movement of i-th vehicle obeying MLSOV model. i-th vehicle on each lane moves one cell in front in one time step with probability  $v_i^t$  at time t provided that the next cell is empty.  $\Delta x_{1,i}^t$  is the distance between i-th vehicle and the nearest vehicle ahead of it on the same lane,  $\Delta x_{2,i}^t$  is the distance between i-th vehicle and the nearest vehicle shead of it on the opposite lane.

## 3 Simulation および理論解析

本研究における合流を改善する方法は、図2(a)-(b) のように二車線間に区画線を引くことである。こ の区画線は車の車線変更を禁ずる線であり、交互配 置化を促進し、乱雑な車線変更をスムーズな車線変 更に変化させると期待される。区画線を引いた箇所 は、図 2 (c) のように両端が開放された cell 状に区 切られる。各車は parallel に update され、左端から 流入し、車線変更せずに右端から流出する。車線変 更はしないながらも、各車は反対車線上の車の動き を見て相互作用する。Simulation にあたり、最も交 互配置化から離れた左端流入条件を採用し、交互配 置化の評価を行う。これは、左端 x=0 の両車線上 の cell が空の場合のみ、確率  $\alpha$  で二車線に同時に流 入する条件である。他のパラメータは、図2中に定 義される。各 lane j(j=1,2) の cell 数は d であり、 左端はx=0、右端はx=d-1である。右端流出 確率は、 $\beta_i$  である。

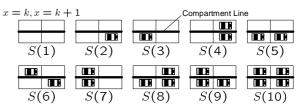
続いて、Simulation における測定量を定義する。 交互配置化の物理量として、Geminity(Ge) を定義 する。Ge は座標 x の関数であり、Ge(k) は、x=kに車が存在する場合に、そのような車の中でどれだ けの車が交互配置状態、すなわち、 $\Delta x_{1,i}^t \geq 1$  かつ  $\Delta x_{2,i}^t \geq 2$  の状態を達成しているのかを表現する。



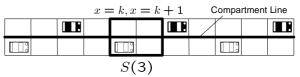
Ge(k) は、図 3 のような x=(k,k+1) における 10 状態  $S(j)(j=1,\dots,10)$  を数え上げて計算される。なお、二車線間の対称性は考慮されている。10 状態のうちで、x=k に車が存在するものは S(n) (n=3,5,6,7,8,9,10) である。そのうちで、完全な交互配置状態 (図 4) が達成されるのは S(3) のみである。ゆえに、Ge(k) は、 $c(j)_k$  を S(j) が数え上げられた回数として、

$$Ge(k) = c(3)_k / (c(3)_k + c(5)_k + c(6)_k + c(7)_k + c(8)_k + c(9)_k + c(10)_k).$$
(4)

のように与えられる。 $0 \leq Ge(k) \leq 1$  であり、Ge(k)が 1 に近いほど交互配置の達成度は高い。



 $\boxtimes$  3: 10 kinds of the state labelled by S(n) in the four cells at  $x = \{k, k+1\}$ . The symmetry between lane 1 and lane 2 is taken into account.



 $\boxtimes$  4: The perfect alternative configuration on the two-lane road. When at least one vehicle exists at x=k, only S(3) represents this perfect alternative configuration.

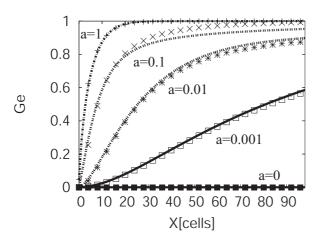
次に、Cluster 近似を用いた交互配置化の理論解析方法を定義する。この近似では、図 2 (c) 中の二車線道路を、 $x=(k,k+1)(k=0,1,2,\ldots,d-2)$  における 4cell に分割する。この 4cell を  $C_k$  とおき、 $C_k$  の定常配置状態を  $k=0,1,2,\ldots,d-2$  の順に計算する。その計算にあたり、時刻 t における  $C_k$  の状態ベクトルを  $\Pi_k^t=\{\Pi(1)_k^t,\Pi(2)_k^t,\ldots,\Pi(10)_k^t\}$  と定義する。ここで、 $\Pi(n)_k^t$  ( $1\leq n\leq 10$ ) は、時刻 t において  $C_k$  が状態  $S_n$  を取る確率である。 $C_k$  における状態遷移は、状態遷移行列  $\mathbf{P}_k$  を介して下記のように与えられる。

$$\mathbf{\Pi}_k^{t+1} = \mathbf{P}_k \mathbf{\Pi}_k^t. \tag{5}$$

従って、 $C_k$  における定常状態  $\Pi_k^\infty$  は、 $\Pi_k^\infty = \mathbf{P}_k \Pi_k^\infty$  の解として与えられる。 $\mathbf{P}_k$  の表現の詳細は、参考文献 [11] に掲載する。

Simulation と Cluster 近似を用いて、Ge(x) と平均 intension の空間分布を出力する。設定条件は、下記の通りである。OV 関数のパラメータを、p=1 および (q,r)=(0.8,0.8) に設定する。5 種類の反応パラメータを、 $a=\{0,0.001,0.01,0.1,1\}$  のように用意する。各 lane の cell 数は、d=100 とする。左端での並走流入確率は、 $\alpha=0.05$  とする。右端流出確率  $\beta_i$  (i=1,2) は、右端における各車の intension とする。これらの境界条件では、流れは常に自由流に保たれる。同一条件での Simulation 回数は 10 回に設定し、各 Simulation での測定時間帯は、 $1000000 \le t < 2000000$  とする。

結果を図 5 に示す。いずれの結果も、Simulation と Cluster 近似とで非常に良い一致が見受けられる。Simulation と Cluster 近似ともに、Ge(x) は空間方向に単調増加している。これは、local な相互作用で交互配置状態が達成されることを意味する。反応パラメータ a が大きいほど Ge(x) の増加が急になる。Ge(x) の計算結果は、交互配置化の達成するための区画線の長さを知る上で、道路設計上大きな意義があると考えられる。



 $\boxtimes$  5: Ge versus x obtained from simulations, and from the four cluster approximation. The results of simulations are represented by points, and those of four cluster approximation are represented by lines. The results of simulations and those of four cluster approximation agree with each other very well. Ge(x) increases monotonically as x increases, and the sharpness of the increase of Ge becomes larger as a becomes larger.

#### 4 結論

本研究では、区画線を引いて交互配置状態を励起し、合流部流れを改善する方法を提案した。Simulation と Cluster 近似とを用いて交互配置化の達成度を解析したところ、両者の結果は非常に良く一致した。この結果は、合流部の設計に大きく寄与することが期待される。

## 参考文献

- [1] D. Helbing, Rev. Mod. Phys. 73 1067 (2001).
- [2] D. Chowdhury, L. Santen, and A. Schadschneider, Phys. Rep. 329, 199 (2000).
- [3] M. Bando, K. Hasebe, A. Nakayama, A. Shi-bata, and Y. Sugiyama, Phys. Rev. E 51, 1035 (1995).
- [4] M.R. Evans, N. Rajewsky and E.R. Speer, J. Stat. Phys. 95, 45 (1999).
- [5] H.Kita, Transportation Research Part A 33 3, 305-312 (1999).
- [6] P.Hidas, Transportation Research Part C 13 37-62 (2005).
- [7] L.C. Davis, Physica A: Statistical Mechanics and its Applications Volume 361, Issue 2, Pages 606-618 (2006).
- [8] M. Kanai, K. Nishinari, and T. Tokihiro, Phys. Rev. E 72, 035102(R) (2005).
- [9] B. Derrida, E. Domany and D. Mukamel, J. Stat. Phys. 69, 667 (1992).
- [10] F. Spitzer, adv. Math. 5 246-290 (1970).
- [11] R. Nishi, Master Thesis in the University of Tokyo, 2008, in preparation.